

# 東邦大学学術リポジトリ



## OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	看護系大学の教養教育科目における初学者の健康観に関する一考察：「健康科学概論」のレポートから
別タイトル	A Study of the health view of beginners in the liberal arts of the nursing college: From the student essay Introduction on health science"
作成者（著者）	松浦, 麻子 / 遠藤, 英子
公開者	FD 委員会 研究推進検討会 (東邦大学健康科学部)
発行日	2018.06.30
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 1(1). p.51 59.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	報告
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD65991379">https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD65991379</a>

## 看護系大学の教養教育科目における初学者の健康観に関する一考察

### —「健康科学概論」のレポートから—

松浦 麻子 遠藤 英子

本研究は、看護系大学における初学者の看護観の構成概念の一つである「健康観」について分析し、看護を目指す学生の健康観形成支援の示唆を得ることを目的とし、レポート課題につけられたテーマとその選定理由について質的帰納的に分析を行った。分析結果は、テーマは15に集約された。選定理由については、11のサブカテゴリーに分類し、【自分を中心にして起きた体験や経験したことがきっかけ】【周りから情報が入ってきたことがきっかけ】【きっかけをもとに追求したい】の3カテゴリーに集約された。これらは、健康観への影響要因がシェーマとなり健康観へと繋がっていくことが考察された。また、学生は、今までの体験や知識に新たな体験や知識の刺激を受け、援助者としての健康観を身につけていく。今後における新たな学修で価値観が刺激されたときに、感受性豊かに反応できるような創造性を持ち合わせることを看護観形成に繋がることが示唆された。

キーワード 初学者、健康観、看護観、健康科学概論、看護基礎教育

#### 1. 研究の背景

日本における人口構造の変化に伴い、疾病構造の変化は医療のあり方に大きく影響している。平成29年9月15日現在の推計で、高齢者は3514万人となり、総人口に占める高齢者人口の割合は、27.7%となっている。超高齢化社会に伴い、国民の健康を守る医療職として、様々な職種が多くの高齢者と関わる場面が急増している。その中で看護職者は国民の健康の保持・増進のための役割を大きく担っている。そして、その支援方法を考える上で看護職者個々の「健康観」が重要な主要概念となり、支援内容に大きく影響する。さらに他職種との連携を活かした活動が推奨されている昨今、より看護者として人々の健康を支える支援を行っていきけるような「健康観」を育成することは重要なことであると考えられる。

健康観とは、健康に関するその人の考え方や見方で健康に関連する行動を導く要因となるものであると考えるため、人々の健康を支

える看護職者自身の健康に関する価値観や認識が支援を行っていくうえで、様々な事象を捉える際には、大きく影響することが考えられる。

人々の健康に対する考え方は、その人の経験してきた体験・学習によって変化し、一人ひとりの発達段階と共に各世代の持つ特徴が健康観に影響を与えると考えられる。また、経済的状況、歴史、文化、社会規範なども健康観に影響を与える要因である。

本研究において、対象となる学生は青年期にあり、身体的な成熟が進み、身体の予備力が大きく、健康不安・病気・障害がもっとも少ない年代である。また、個人として独立したライフスタイルが確立し始める時期でもある。齋藤(2000)は、「青年期は、幼児期や少年期で社会化された保健知識や保健態度、保健行動を成人期へと定着させていく上で重要な時期である。これら保健的社会化のプロセスの中で重要な媒介変数としての保健態度の

確立にとって、もっとも大切な時期である」と述べている。これらのことから、この時期の健康観は今後にも大きく影響を与えることが考えられる。看護職者としての健康観を育てていくに当たり、看護を目指し入学してきた青年期である学生の健康観を把握することは、とても重要であると考えられる。

看護学生の入学当初の健康観について研究されたものに小澤（1988）の調査があるが、西暦 2000 年以前のものであり、現在の社会背景と相違があることが考えられる。また、それ以降の研究では看護系学生を対象にした食生活と健康行動、ライフスタイルなどの実際の生活に着目した研究はあるものの健康観に焦点をあてた研究は見当たらなかった。

また、看護基礎教育において、看護学生は実習を通して、対象者に実際に関わりながら看護とは何かということを考え、学びを深めていくという教育上の特徴があるため、実習で経験したことを基にした健康観に関する研究はいくつか見受けられた。しかし、教養教育科目を通じた健康観に関する研究は見当たらなかった。

本学部は、平成 29 年度開設された看護系大学であり、教養科目としての「健康科学概論」は、当大学の教授である医師と看護職の経験のある教授 2 名により、講義科目の 1 単位を開講している。本科目の授業概要は、「健康科学に関するさまざまな概念や社会理論などを学び、身体面・精神(心理面)・社会面のある個人の健康、個人・家族・社会という生活体が構成する集団の健康、疾病・加齢による身体の健康など、多角的に理解し、人類とそれを取り巻く健康な社会について科学的に探求する視座を修得すること」である。

そこで、今回の研究では、初学者の健康観を明らかにすることで看護基礎教育における健康観形成支援の示唆を得ることができないのではないかと考えた。

## II. 研究目的

本研究は、看護系大学における初学者の看護観の構成概念の一つである「健康観」について分析し、健康観に影響を及ぼすと思われる看護基礎教育のあり方についての検討材料および、看護を目指す学生の健康観形成支援の示唆を得ることを目的とする。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象者

平成 29 年度入学 1 年生 78 名である。対象学生の必修既習科目は、教養教育科目では、自然科学概論・情報学概論・化学・生物学・語学・コミュニケーション論・プレゼンテーション論・心理学・教育学、専門基礎教育科目では、人体の構造と機能 I、専門教育科目では、看護学概論・トランスレーショナルへの挑戦・老年看護学概論である。また、教養教育科目である健康科学概論（平成 29 年 4 月 10 日～6 月 1 日開講）全 8 回の講義を受講している。

### 2. 分析対象

分析対象となるのは、教養教育科目である健康科学概論（平成 29 年 4 月 10 日～6 月 1 日開講）全 8 回の講義終了後に提出されたレポートである。レポート課題は、「人間を多角的に捉え、人間の尊厳を考え、健康観として述べる」である。テーマをつけること、テーマ選定の理由を記載することがレポートの課題であった。具体的分析対象は、テーマ名、テーマの選定理由、使用した文献の種類とその数である。

### 3. 用語の操作的定義

#### 1) 健康観

健康に関するその人の考え方や見方で健康に関連する行動を導く要因となるもの。

#### 2) 看護観

看護に関するその人の考え方や見方や信念。

看護に関連する行動を導く基盤となる考え方。

#### 4. 「健康科学概論」授業展開状況

本科目の講義内容は、1 回目当大学の創始者の精神を基に、人間の取り巻く環境における人間の適応及び健康について考え、人間の尊厳を考える。2 回目は人間の健康を守るための医学の歴史を知り、医学とは何かを考える。3 回目は、健康の定義、生涯の定義を考えながら健康の価値を考える。病む人格体としての人間 (**suffering person**) を捉える。4 回目は、身体的側面から見た健康の段階 (レベル) を科学的に捉える。病気の予防～疾病の発祥～病気の回復過程を学ぶ。5 回目は、身体的側面から見た老化及び死を考える。6・7 回目は 13 グループに分かれ、指定された 11 のテーマに沿ってグループワーク・発表を実施した。テーマは、①健康に影響する因子について、②社会・時代的背景と青年期の特徴との関連、③良い睡眠を得られる条件とは、④食生活と健康とのかかわりについて、⑤運動と健康の関連について、⑥運動の効果とその仕組みについて、⑦排泄と健康のかかわりについて、⑧食生活と排泄について、⑨アルコールの代謝について、⑩適正体重を保つためのカロリーのとり方と運動、⑪心と健康のかかわりについてである。8 回目は、障害を持った生活者が身体的側面・精神 (心理) 的側面、社会的側面から現代社会の中で、自己の健康を保持するためにどのように適応しながら生活したらよいか考えるである。

すでに、成績結果を公開しており、学生には課題レポートへのコメントを入れ、フィードバック済みである。

#### 5. データ分析方法

分析方法は、以下の手順で質的帰納的分析を行った。

##### 1) テーマについて

類似したテーマをカテゴリー化した。

##### 2) テーマ選定理由について

レポートテーマ選定の理由となる具体的内容に該当する部分を抜き出し、その際、文脈が不明瞭な部分にはレポートの内容から当てはまる内容を補足した。抜き出して補足した文章の意味内容を損ねないよう一文で表現し、コード化した。次に、コードの意味内容が類似しているものを集め、サブカテゴリー名をつけ、サブカテゴリーの意味内容が類似するものを集め、カテゴリー名をつけた。分析は研究者間で合意するまで繰り返して行い、分析結果の信頼性・妥当性の確保に努めた。

##### 3) 活用した引用・参考文献

レポートに記載してある文献の種類と数について集計を行った。

#### 6. 倫理的配慮

研究対象候補者に対して、研究協力依頼文書を配布し、分析対象となる課題レポートは成績が決定しており、公開済みであること、研究目的・方法、自由意志に基づく研究参加の保障、研究不参加に関しての今後の学生指導への影響がないことの保障についての文書を一緒に見ながら、書面と口頭で説明した。研究協力同意書を配布し、同意書の説明を加え、研究参加に同意する場合は研究協力同意書を提出するよう依頼した。また、同意撤回書も同時に配布し、いつでも同意が撤回できることを書面・口頭にて説明を行い、同意が得られた学生のレポートのみを分析対象とした。

また、収集したデータは研究者の研究室で鍵付きロッカーに保管し、集計後のデータは USB メモリに保存保管し、学外への持ち出しは禁止とした。データの保存期間は、研究終了後 5 年間とし、保管終了後は USB メモリを物理的に破壊する。

本研究は、研究者の所属機関において生命倫理委員会の承認を得た。(承認番号健倫承第 29-2 号)

#### IV. 結果

##### 1. 分析対象者の概要

研究依頼文書を受け取った研究対象候補者 78 名のうち、研究参加に同意したものは 77 名であった。

##### 2. テーマについて

レポートテーマの記載があった 77 タイトルを分析対象とした。記述内容からも類似したテーマごとに分類し、15 カテゴリーに集約した。結果を表 1 に示す。以下、カテゴリーを【】で示す。

【排泄に関すること】、【食生活に関すること】、【睡眠に関すること】、【身体活動に関すること】、【喫煙に関すること】、【飲酒に関すること】、【疾病に関すること】、【代替療法に関すること】、【加齢に関すること】の 9 カテゴリーは主に身体的な視点、【精神的なことに  
【社会からの情報に関すること】、【情報システムの活用に関すること】、【自分の周りの環境に関すること】、【看護師としての働き方に関すること】、【死に関すること】の 5 カテゴリーは主に社会的な視点であった。

多岐にわたっているテーマの中でも一番多く占めているものとして、【精神的なことに  
【睡眠に関すること】、【食生活に関すること】、【喫煙に関すること】があった。

##### 3. テーマの選定理由について

テーマの選定理由の具体的内容に該当する部分を抜き出し、文章の意味内容を損ねないように一文で表現した 158 コードが抽出され、その全てを分析対象とした。158 のコードを意味内容が類似したもので分類し、11 のサブカテゴリーに集約できた。さらに、サブカテゴリーの意味内容が類似するものを集め、3 カテゴリーに集約した。その結果を表 2 に示す。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》、コードを<>で示す。

テーマを選定した理由のカテゴリーの内容は、【自分を中心にして起きた体験や経験したことがきっかけ】、【周りから情報が入ってきたことがきっかけ】、【きっかけを元に追求したい】であった。

表 1. レポートテーマ (n=77)

カテゴリー	テーマ数
排泄に関すること	2
食生活に関すること	8
睡眠に関すること	11
身体活動に関すること	4
喫煙に関すること	8
飲酒に関すること	1
疾病に関すること	6
代替療法に関すること	5
加齢に関すること	2
精神的なことに 社会からの情報に関すること	12
情報システムの活用に関すること	7
自分の周りの環境に関すること	3
看護師としての働き方に関すること	4
死に関すること	3
	1

【自分を中心にして起きた体験や経験したことがきっかけ】に含まれる学生のテーマ選定理由は、自分自身の祖父母または家族が経験した病気の体験、または健康に害を及ぼすと考えている喫煙をしているなど《家族の健康に関わることから》であった。また、<幼少のころからアレルギー体質である>こと、<心の健康が身体にも深く影響していると私の経験から感じた>など《自身の幼少のころからの体験や今までの経験から》が影響していた。

そして、大学入学にあたり学生は新たな環境下での生活を余儀なくされ、《大学生になったことで生活の変化に伴って体験したことから》影響を受け、テーマを選定していた。大学生になったことで<食生活が変わった>ことや<睡眠時間が短くなりがち>、注意喚起のために配られた<広告紙で、酒や飲み会



に対する恐怖を覚えた>ことなど、ここでも自分自身の日常生活の中にあることをきっかけにそれぞれの興味関心のあるテーマについて選定を行っていた。また、レポート作成時点では専門的な「健康」や「看護」をほとんど学習していないため、<自分自身が健康でないと看護はできない>、<身体面が健康であること><自分よりも高齢の人を看護する立場にあったとき自分の経験から予測することは不可能>とするなど、《現時点で捉えた自分の価値観をもとに考えたことから》よりそのテーマについて検討したい、考察してみたいという理由であった。このカテゴリーは、自分自身の体験や経験を下に形成された価値観が元となってテーマ選定の理由となっていることが考えられた。

【周りから情報が入ってきたことがきっかけ】のテーマの選定理由は、《メディアから発信された社会情報が入ってきた》ことや、《授業から情報が入ってきた》であり、これらをきっかけとして、健康に関する内容に興味関心を持ち、健康課題として取り上げていた。

特に、《メディアから発信された社会情報が入ってきたこと》においては、印象的なものとして<メディアでよく見かけた>、<ネットニュースで知った><コミュニケーションを SNS に依存している>という選定理由が含まれ、現代の社会背景を反映していた。

【きっかけを元に追求したい】に含まれるテーマ選定の理由は、《知りたい》、《明らかにしたい》、《持っている知識を元に活用したことで考えたい》、《これを機会に改めて考えたい》《今後の行方を考えたい》であった。

自分で選定したテーマについて単に《知りたい》、《明らかにしたい》というきっかけから、入学間もない段階ではあるがこれまでの経験や知識、また【周りから入ってきた情報がきっかけ】となり、<よいストレスと悪

いストレス、それぞれがどのようなものであるのか>、<震災後の避難生活という非日常の生活の中で、日常の健康状態であることは難しい>などといった《持っている知識をもとに活用したことで考えたい》ことを掘り下げて考察を行っていた。

さらに、今回のレポート課題をきっかけとし <その状況の中での最良の健康とはなんだろうか>、<美味しく飲食できることが健康の判断基準となるのか>など、《これを機会に改めて考えたい》ことがテーマ選定の理由として挙げられていた。

さらに、<日々の生活の中でどのように関わっていくべきなのか>、<薬を健康的に服用するためにはどのようにすべきか>など、《今後の行方を考えたい》という理由が挙げられていた。

表 2. テーマ選定の理由

サブカテゴリー	カテゴリー
家族の健康に関わることから	自分を中心にして起きた体験や経験したことがきっかけ
自身の幼少のころからの体験や今までの経験から	
大学生になったことで生活の変化により体験したことから	
現時点で捉えた自分の価値観をもとに考えたことから	周りから情報が入ってきたことがきっかけ
メディアから発信された社会情報が入ってきた	
授業から情報が入ってきた	きっかけをもとに追求したい
知りたい	
明らかにしたい	
持っている知識をもとに活用したことで考えたい	
これを機会に改めて考えたい	
今後の行方を考えたい	

4. レポート作成に使用した文献の種類と数  
全レポートに対して使用した引用・参考文献の資料数は、218 件であった。この中で、115 件がインターネット上から用いた資料であった。一人当たり平均 2.8 件の資料を用い

ていた。また、文中の引用の明記が曖昧なものも多かった。

## V. 考察

### 1. テーマについて

テーマを分類し集約した視点は、既習学修の中で、WHO の健康の定義「健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること」(1946) に即していた。学生は、既習の知識のもと、この3側面から健康に関する事象を見つけ出し、レポート課題のテーマを決定したと推察される。これらを踏まえ、テーマの特徴について考察する。

多岐にわたっているテーマの中でも一番多く占めている【精神的なことにすること】、【睡眠に関すること】、【食生活に関すること】、【喫煙に関すること】は、対象者が現実の生活行動や生活体験が大きく影響していることが推測される。

人々の健康に対する考え方は、その人の人生における様々な体験や学習によって変化し、一人ひとりの発達段階と共に各世代の持つ特徴が健康観に影響を与えられとされる。テーマも同じものはほとんどなく、一人ひとり異なっており、それぞれの健康観が表現されていることが示された。また、経済的状況、社会的背景、分解、社会規範など多くのものが健康観に影響を与える要因であり、岡本(2006)によると看護学生の捉える健康認識に関する健康観の構成要素として、「人間関係の中での生きがい」、「福祉と社会保障」、「生活環境」、「健康管理」があげられており、これら全ての構成要素が本研究においても網羅されていることが推察される。今後、対象である学生はこのような構成要素を元に健康観に関する様々な影響要因と多く触れ合い、健康観に関する内容も深みを増すことになると考えられる。

将来、看護専門職者として対象者に健康を支援していく学生への健康観形成への支援をしていくためにも、教員は健康観に影響する要因を理解した上で、様々な角度からの学習機会を増やし、健康に関する考えを拡充させていく必要があると考える。臨地実習のみならず学生の体験・学習機会を捉え、教員の適確な学生指導が看護基礎教育の中では重要であると考えられる。

### 2. テーマの選定理由について

前述したように、学生は、健康を身体的・心理的・社会的の3側面から事象を捉えていたことが推察できる。選定理由と関連して読み解くと、【自分を中心に起きた体験や経験したことがきっかけ】で理由を述べている学生から【きっかけをもとに追求したい】と発展して述べている学生まで健康を捉える見方には大きな幅が存在している。

長谷川(2011)は、看護学を学び始めたばかりの学生に、「健康」という言葉を聞いてもその表現は十人十色で「健康」のイメージや捉え方は人それぞれであると述べている。

テーマと同様、学生は今までの人生における様々な体験や学習、そして発達段階とそれぞれの特徴が健康を解釈するのに大きく影響していると考えられる。また、対象学生は、看護系大学に在籍しており、入学前より「健康」に対して他分野を専攻している学生より関心が高い傾向にあるということが特徴であると考えられる。

そして、入学前の段階で入試対策として社会情勢や地域の問題などに関しても情報収集をしていることが推測されることから、それらの知識・情報もレポートに活用しているのではないかと考える。これらを踏まえ、対象者がテーマを選定した理由について、考察を進めていく。

【自分を中心に起きてきた体験や経験したことがきっかけ】のカテゴリーは、自分の身

の回りにいる近い人の病気や健康障害に影響する事象が身近にあることで健康について考えるきっかけとなったことが推察できる。また、自分自身の体験や経験自体が健康観に影響していることが推察できる。

これは、岡本（2006）が述べている健康観の構成要素である「生活環境」「健康管理」と合致していると考えられる。

《家族の健康に関わることから》《自身の幼少のころからの体験や今までの経験から》《大学生になったことで生活の変化により体験したことから》のサブカテゴリーより、学生はおかれた環境下で自分を中心として身近な存在の人に起きていること、自分自身の体験や経験の中で日常生活に関することに興味関心が強くひきつけられていることが考えられ、光樂（2012）は、家族や親戚の健康に関することは、健康観に大きく影響していると述べている。本研究でも、同様の結果が出ていると推察することができる。

【自分を中心にして起きた体験や経験したことがきっかけ】のカテゴリーでは、「健康」というものが一般的に想起される身体的な側面のみならず心身という2側面からの概念へと発達し、さらには生活という社会的な概念へと拡大され、その中で体験や経験も反芻しながら、自己の価値観となっていくような健康観そのものの変遷過程が垣間見れているのではないかと考える。

【自分を中心にした起きた体験や経験したことがきっかけ】、【周りから情報が入ってきたことがきっかけ】のカテゴリーに表されているような、レポートテーマ選定理由が具体的事象だったことに比べ、残りのカテゴリーは、そのテーマをさらにどのように理解し、解釈していくべきなのか、そして、それがどのようなようになっていくのかというような未来的思考を表しているのではないかと考える。

出てきたテーマ選定の理由のサブカテゴリーとカテゴリーを並べてみたときに学生の

「健康観」の見方や捉え方には、自分自身の体験や自分を中心とした身の周りに起こっていることや社会や授業から得た情報が基となり、物事を追求していきたいという「健康観」のパラダイムがあり、健康観に影響するシェーマと捉えることができるのではないかと考える（図1）。

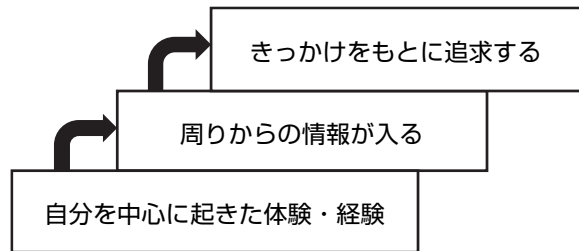


図1. 看護学初学者の健康観に影響するシェーマ

### 3. 使用文献について

課題レポート提出に際し、文献の記載を指示したところ、全文献資料218件に対し、115件（52.8%）がインターネット上からの文献・資料等であった。これは、使用文献の半数以上に値し、学生たちはいかにインターネット上の情報が学生たちに浸透しており、当たり前のように活用されているという現状が示されている。今後、様々なレポート課題を作成するにあたり、文献の扱いに関する学習も必要になると考える。

### 4. 初学者の健康観形成支援

健康観は個人の人生観や価値観によって異なるばかりでなく、育ってきた文化的・社会的背景によっても大きく異なっていることは明らかである（菱沼、1993）。今回の分析対象になったテーマやテーマ選定理由を見るだけでも各々の健康に対する考えが表出されている。

入学間もない学生でありながらも看護学生として、これから看護の道を歩もうとする時に考えられる懸念事項や将来、自身に降りかかるかもしれない健康問題をテーマに挙げ、



すでに看護という職業のアイデンティティを獲得しようとしていることも示唆される。

そのような健康観に対する価値観を持ち合わせた学生に対して、これからの看護観を形成するに当たり、自分の健康観にとどまらず、自分を取り巻く環境の中で多くの人々との意見交換を交えながら、考え方・捉え方の広がりを持つよう教育支援をしていくことが重要となると考える。

そして、本科目において、授業内でグループワークを実施したことが、自己または他者と健康に関する考えを広げる機会になっていたと考えられる。そして、レポートテーマに反映されているものの影響として、グループワークで行った内容が含まれていることが考えられる。入学後、初学者である学生が初めての健康に関する授業の中で、自分以外の健康観により多く触れる機会となったことが推測できる。また、最終的にレポート課題に取り組んだことも自己の健康観について再確認する機会になったと考えられる。このように何度も自分自身と向き合うことで、健康観が強固になっていくと推察できる。

学生は、今まで持っている体験や知識にさらに新たな体験や知識が健康観を刺激しながら援助者としての態度を学ぶことで、さらに新しい価値観を身に付けていく。そのためにも、持ち合わせている体験や知識を増やし、刺激されたときに感受性豊かに反応できるような創造性を持ち合わせるが必要となっていくと考えられる。教育を支援する側は、学生が看護援助者として「看護観」を形成していくために、どのような健康観・看護観を抱いているか、意図的な教育計画の立案が、重要となってくると考える。

## VI. 結論

本研究において、教養教育科目である健康科学概論を受講した看護系大学における初学者の看護観の構成概念の一つである「健康観」

の全体像について明らかにすることができた。

その内容は、15 カテゴリーのテーマに集約され、選定理由については、11のサブカテゴリーに分類され、【自分を中心にして起きた体験や経験したことがきっかけ】【周りから情報が入ってきたことがきっかけ】【きっかけをもとに追求したい】の3カテゴリーに集約された。これらは、健康観への影響要因がシエマとなり、看護観へと繋がっていくことが考察された。また、学生は、今までの体験や知識に新たな体験や知識の刺激を受け、援助者としての健康観を身につけていく。このように、新たな学修で価値観が刺激されたときに、感受性豊かに反応できるような創造性を持ち合わせることで看護観形成に繋がるのではないかと示唆された。

しかし、本研究では、レポート課題という一側面からの「健康観」の考察であったため、初学者の健康観の全貌というには、限界がある。今後は、今回の対象学年の看護観への成長状況と他学年の健康観に関するデータの蓄積をしながら、看護基礎教育の学習課程評価の資料として活用していきたいと考える。

## VII. 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## 謝辞

ご協力いただいた「健康科学概論」担当教員である山崎純一学長に深謝致します。

## 文献

- 藤崎郁, 長谷川万希子 (2011): 系統看護学講座 専門分野 I 基礎看護学 [1] 看護学概論. 第14版9刷, 医学書院, 70-71.
- 菱沼典子 (1993): 看護学における「健康」の概念. 聖路加看護大学紀要, 19, 1-8.
- 光樂香織 (2013): 看護学生の入学前の経験が健康観に与える影響. 了徳寺大学研究紀要, 7, 103-112.

中野照代, 藤生君江, 鈴木知代, 他 (2005)  
: 看護学生と教育学部学生の健康習慣・健康  
観の比較研究. 聖隷クリストファー大学看護  
学部紀要,13,91-104.

小澤美智子, 香春知永, 横山美樹, 他 (1998) :  
看護学生の入学当初の健康観とそれに関与す  
る要因. 聖路加看護大学紀要,24,14-20.

岡本佐智子 (2006) : 看護学生の捉える健康観  
に関する研究. 日本看護学会誌,16(1),75-82.

齋藤恭平 (2000) : 青年期の健康課題. 健康社  
会学研究,1(1),24-28.

WHO 世界保健機関憲章前文 (日本 WHO 協  
会仮訳)